"学ぶ"に寄り添う
コミュニケーションマガジン

社内報アワード
受賞

NEWS LETTER
SEIGAKUIN NEWSLETTER

& Seig

No.
283
Sep.2022

各校・各園卒業生インタビュー
歩む人たち
女子聖学院中高卒業生　川越 麻弓さん

関係団体の皆さんにインタビュー
支える人たち
女子聖学院中高吹奏楽部コーチ　岡本 謙先生

記念祭／ヴェリタス祭

特集
聖学院の音楽教育

巻頭座談会
元聖学院小学校校長と聖学院小学校音楽科教諭
聖学院大学児童学科准教授による
トークセッション

& Seig NEWS LETTER

SEIGAKUIN NEWSLETTER

No. 283 Sep.2022

CONTENTS

特集
01_ **聖学院の音楽教育**

元聖学院小学校校長と聖学院小学校音楽科教諭
聖学院大学児童学科准教授による
トークセッション
03_ &Talk

聖学院各校の音楽教育
07_ **focus**

07_ 音楽関連行事
［聖学院小学校］

08_ 教養としての音楽とハレルヤコーラス
［女子聖学院中学校・高等学校］

09_ 多角的に音楽に触れる授業を展開
［聖学院中学校・高等学校］

10_ パイプオルガン設置に向けて
［聖学院大学］

11_ 各校・各園卒業生インタビュー
歩む人たち ［川越麻弓さん］

関係団体の皆さんにインタビュー
12_ **支える人たち** ［岡本 謙先生］

13_ 記念祭／ヴェリタス祭

14_ Seig NEWS

17_ 2023年、聖学院は創立120周年を迎えます

120年の轍を歩む
19_ **聖学院歴史探訪**
日本でのディサイプルス教会の伝道
［EPISODE #18］

聖学院ニュースレターアンケート

QRコードからあなたの声をきかせてください。アンケートに回答いただいた方の中から抽選で10名様に「聖学院オリジナル箸セット」をプレゼント！いただいたご意見は、編集の上、本誌にてご紹介させていただくことがあります。

●有効回答期間
2022年9月29日～2022年11月30日

●当選発表
当選者の発表は、賞品の発送をもって代えさせていただきます。

本アンケートに関するお問い合わせ
聖学院広報センター Tel 03-3917-8530

編　　集／学校法人聖学院 広報センター
デザイン／株式会社キュー・ジー
発 行 日／2022年9月21日

特集

聖学院の音楽教育

めまぐるしく変化する現代において、近年、人と音楽の関わり方も変化してきているように感じます。動画配信サービス、音楽のサブスクリプションサービスの誕生により、以前よりも簡単に様々なジャンルの音楽に触れられるようになりました。また楽曲制作においても、ＡＩが補助してくれることで誰でも気軽に曲作りを楽しめるアプリがあり、作曲は一部の素養をもった音楽家だけのものではなくなりつつあります。一方、新型コロナウイルスの影響により学校で歌が歌えない、リコーダーが吹けない、などの制約も出てきました。

このような時代において、音楽教育にはどのような変化があるのでしょうか。あるいは変わらないものとは何なのでしょうか。音楽教育の意義を解き明かしつつ、聖学院の各校が大切にしているものとは何かについて、理解を深めていきたいと思います。

&Talk

特集　聖学院の音楽教育

自分にしか出せない音があります。
それぞれがその音をもって集まるから
アンサンブルは楽しい。
それだけで人生は豊かになります。
そのことを経験できるのが学校です。

久保田 翠（くぼた みどり）

東京藝術大学作曲科卒業、東京大学大学院修士課程修了。神戸女学院大学音楽学部専任講師を経て2017年より聖学院大学准教授。2020年に発表したアルバム『later』は各所で好評を博した。著書に『ピアノで弾く チャーチソング ～讃美歌・聖歌』など。
https://midorikubota.net

村山 順吉（むらやま じゅんきち）

2017年3月まで学校法人聖学院理事、聖学院小学校校長、聖学院大学児童学科教授・学科長、大学院兼任教授、付属みどり幼稚園長兼務。現在は母校（学校法人自由学園）理事長、聖学院大学名誉教授、日本演奏連盟会員。日本同盟基督教団小平聖書キリスト教会員。

官野 菜摘（かんの なつみ）

聖学院小学校音楽科教諭。玉川大学芸術学部芸術教育学科を卒業後、私立高校にて音楽科非常勤講師を務める。2022年4月より現職。在学中はピアノを専攻するほか、大学オーケストラでチェロを演奏する。現在は1,2,3,5年生の授業を担当する。

文部科学省の音楽科の小学校学習指導要領には「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力の育成」（※1）という言葉が繰り返し出てきます。音や音楽と豊かに関わることの大切さとは何か。ピアニストとしてリサイタルやオーケストラとの協演をされている元聖学院小学校校長・元聖学院大学児童学科長の村山順吉先生、聖学院大学児童学科にて小学校・幼稚園教諭を目指す学生を指導している久保田翠先生、今まさに聖学院小学校の音楽教育の現場に立っている官野菜摘先生の3名にお集まりいただき、お話をうかがいました。

音に出合い、自分の大切さ、人の大切さを知る

――音楽教育の意義について教えてください。

村山　子どもが自分の心に響く音や、自分にとって心地よい音に出合うということはとても大切だと思います。その感覚は尊重されるべきものですし、その子どもの感覚や感性が大切に扱われることは、子どもそのものを大切にすること、大切に育てていくことだと思っています。音楽の授業の中で合奏をした時、子どもたちは、自分と他の人とでは好きな音や良いと思う音が違うことに気付いていきます。そして奏でる音も違うことに気付きます。一人ひとりにそれぞれの音があるのです。自分と違う音でも素敵な音があることにもまた気付いていきます。一人ひとりが違った音を奏でながら、みんなの音が生きていく。誰かが欠けたら違う響きになってしまいます。この体験は、自分たちの誰もが取りかえることができないたった一つの大切な存在であることを教えてくれます。他の人の音も尊重できるようになるのです。これは授業があるからこそできる体験だと思います。

久保田　村山先生のおっしゃる通り、音楽教育には、他者の存在を受け入れて認めるという側面があると思います。ある音楽について、他の人がどう感じているか、どう表現しているかを知る機会はそう多くはないかもしれません。しかし学校では常に他の人の価値観に触れることができます。他の人の奏でる音楽や知識や価値観に触れ、比較することで、自分にとっての音楽の意味が見えてくることがあると思います。また、ある音楽が教科書で扱われていたとして、自分はその音楽を知らなかったとしても、そこで扱われているということにより、その音楽は誰かにとっては意味があるのだということを知ることができます。音楽教育にはこのような意味と役割があると思います。

官野　今、ちょうど小学校2年生で合奏をやっています。教科書に掲載されている楽譜を、メロディーラインと対旋律に分かれて、木琴と鍵盤ハーモニカで演奏しています。鍵盤ハーモニカだけではメロディーがはっきりせず、子どもたちは消化しきれない様子だったのですが、木琴と合わせた時、初めて一つの曲が成立したことを実感できたようで、子どもたちの感動が教室全体に広がりました。合奏は一緒に音を出す楽しさと、曲が完成したという達成感を子どもたちに与えてくれます。それがこうした「感動体験」となります。楽しいと感じることが大切で、そこから「次にこれをしたらどうなるんだろう」という知的好奇心の芽生えにもつながっていくように思います。

久保田　官野先生のお話をうかがい、合奏をする時の子どもたちの反応と大学生の反応は本質的なところでは変わらないと思いました。年齢、経験、立場とは関係なく、一緒に音を出し合奏するのは楽しいことです。その楽しさを同じ空間で分かち合えるのは音楽の良いところだと思います。私の授業でも学生たちに楽しくあってほしいと思っています。

音楽は楽しいということを知ってほしい

――音楽の授業で課題に感じていることはなんですか？

官野　実技の序盤でつまずくと苦手意識を持つ子どもたちがいます。特にリコーダーは取り組む曲が難しくなってくると指を変えたりタンギング（※2）をしたりと、やることが増えるので子どもたちがつまずきやすくなります。

私のとっておきの1曲　村山先生：ノクターン嬰ハ短調「レント・コン・グラン・エスプレッシオーネ」（遺作）（フレデリック・ショパン作曲）

聖学院小学校の児童がクラブ活動において、iPadのアプリで作曲にチャレンジしました。

一方で、指の押さえ方やタンギングの仕方など、苦手なところは共通しているので、私はそこを丹念に教えるようにしています。それでもうまくいかない子には、休み時間に練習に誘っています。もちろん自由参加です。練習にきた児童には、マンツーマンで教えています。苦手意識から音楽の時間が嫌いになってしまわないように、児童に寄り添いたいと思っています。子どもたちの興味を惹くことのできるディズニーの曲などを取り入れて、やる気をアップさせる工夫もしています。

久保田　教職を目指す学生の中に、ピアノを弾いたことがないという学生が増えています。数十年前までは子どもの頃にピアノを習っていたという学生が多かったのですが、今はそういう時代ではありません。大学では、そうした学生を単位修得できるレベルまで持っていくことが課題になっています。教職を目指す大学生には、より自発的な努力が求められますし、教員としても彼らが努力しやすい環境を作ることが重要になります。例えばマスターする曲数を設定するなど目に見える目標を掲げたり、初心者から経験者までレベル別に課題曲を作りアレンジして、どのレベルの学生でも達成感を得られるよう工夫しています。努力している学生はちゃんと弾けるようになります。入学して初めてピアノに触れたという学生が、感動するぐらい弾けるようになるので、私の方が驚くことがあります。

村山　まず何より楽しいと思うことが重要だと思います。私は聖学院大学にいた時、児童学科の学生に音楽が好きか嫌いかというアンケートをとったことがあります。嫌いと答えた学生が少なからずいました。その理由のほとんどは、習い事や家での練習で怒られたことに起因していました。音楽ではないところの体験が音楽にくっついてきたことで音楽が嫌いになっていることが多いのです。実際、音楽を嫌いと答えた学生たちにも好きなバンドや歌手がいて日常的に音楽を聴いています。そういう理由で音楽との関わりが変わってしまうのはとてももったいないと思います。そうならないようにしたい。だから達成感を得たり、好きなものから入るというのはとても大切なことだと思います。

音楽との関わりが多様化したことで生まれた変化

——動画配信やサブスクリプション、またアプリやAIにより、子どもたちと音楽との関わり方にどのような変化がありますか。

村山　ある歌人が短歌を作る時にAIを使っているという話を聞いたことがあります。上の句を入力すると下の句をAIが作ってくれるそうです。その方はそれで短歌を作っているというよりヒントを得ていると言ってました。音楽においてもAIが曲を作ってくれるアプリがあります。ただAIに曲を作らせて終わりではなく、それを一つの参考として、自分の可能性を広げていくことが大切だと思います。

久保田　作るという点では村山先生のおっしゃる通りだと思います。一方、音楽との出合い方も、サブスクリプションやYouTube、SNSによって大きく変わったと感じています。学生はサブスクリプションのレコメンド機能やYouTubeの関連動画、SNSのタイムラインで曲を知ることが一般的になってきています。ただレコメンドや関連動画やタイムラインはいずれもその人のアカウント上の履歴などによって作られています。どうしても偏りが出るので、本当の意味で新しい出合いがあったと言えるのかは疑問に感じています。今の時代、本当に新しいものに出合うのは難しくなっているのかもしれません。検索するにしても、自分が知っている言葉でしか探せません。ですので、私は学生が普段聴かないであろう音楽を授業でどんどん提示していきたい。ノイズを持ち込む者でありたいと思っています。それができるのが授業の良いところでもあるのですから。

官野　授業ではないのですが、今、聖学院小学校にiPadクラブというクラブ活動があり、アプリで曲を作ることに挑戦しています。今の小学生はデジタルネイティブ世代ということもあって適当に触って感覚で使えてしまうんですよね。私が子どもの時はまだ

私のとっておきの1曲　久保田先生: ウェスト・サイド・ストーリー（レナード・バーンスタイン作曲）

アプリはありませんでした。ピアノで適当に鍵盤を押すと不協和音が鳴ってしまいます。曲を作るには理論や和声を理解しながらステップを踏んでいく必要がありました。今の子どもたちはこのスイッチを押せばこういう和音が出てくるという仕組みをすぐに理解します。アプリ自体もメロディーがなくてもその和音の移り変わりだけで自然と曲っぽくなるようにサポートしてくれます。子どもたちにとっては楽しいと思います。

一方、そのアプリがプログラムだからといってみんな似たような曲になるかというと、そんなことはなく一人ひとり違う曲になります。アップテンポの曲、スローテンポの曲、クラシックのような曲、ハードロックのような曲。個性が反映されるんですよね。今まではピアノのコンクールで賞を取るなどした、一部の人しかアーティストになれませんでした。今は、楽器は演奏できないけれどもアプリで曲を作るアーティストの方もいます。技術的に苦手なことはテクノロジーで補って自分を表現できますし、好きなことを入り口として突き詰めれば形になるということを小学生の時から体験できるのはとても良いことだと思います。まず楽しいという意識を持ってもらうということにテクノロジーは活用できると思います。音楽に親しみ楽しむ入り口が広がったと考えています。将来的に授業の中でも扱っていけたら良いなと思っています。

変わらずに大切にしたいこと

――聖学院は学校を問わず一流のものに触れる機会が豊富だと思います。そのことに対する思いや考えをお聞かせください。

官野　先ほども話に出たように、動画配信やサブスクリプションによって音楽に触れる機会は増えたと思います。ただ耳だけで聴く音楽は一方通行になってしまうので、それと並行して、やはり生の演奏を聴くことが大切だと思います。演奏会場には奏者がいて聴衆がいて、息遣いを肌で感じることができます。自分もその要素の一つとなります。誰かに届くことで音楽が完成するとするならば、その完成する現場に居合わせることで音楽の根幹を感じることができると思います。子どものうちにそういう空気感に触れることは必要だと思っています。

久保田　幼稚園教諭や保育士の中に、声の出し過ぎで喉を痛めたり、ポリープができてしまう人が結構います。一方、声が出る仕組みや健康的な声の出し方はなかなか勉強できません。ですので児童学科では、プロのオペラ歌手をお呼びして発声の基礎を学ぶ授業を数回設けています。ワークショップ形式でウォーミングアップから発声まで行い、最後にオペラ歌手の方に2～3曲歌を披露してもらいます。それにより、技術としての声の出し方を学ぶだけではなく、この声を出すために、何年も毎日毎日練習を積み上げているということが学生に伝わります。単にプロの演奏や歌を聴いて美しいと感動するだけではなく、技術を身につけるにはどれだけ時間を必要とするのかを学生たちには感じ取ってほしいのです。それは、音楽家になるわけではなくても、職業人としての人生を歩む上で役に立つ経験だと思います。職業人とは責任をもって技術を身につける人のことで、そのことを音楽を通じて伝えられたら良いなと思っています。

村山　コロナ禍によってここ2～3年はできていませんが、ウィーンフィルハーモニーの前コンサートマスターのダニエル・ゲーデ氏（※3）を何度か聖学院に招いてコンサートを開いてもらっています。数年前、ゲーデ氏の横で数人の児童も一緒にヴァイオリンを演奏させてもらったことがありました。1曲だけとはいえ、子どもたちにとって、とても良い経験になったと思います。プロかどうかに関わらず、奏でられる音そのものを人生をかけて大切にしている人たちの演奏は、それだけで素晴らしいと私は思っています。そういう音をすぐ横で自分の音と一つになりながら感じることができ、彼らの心の中に何か響くものがあったのではないでしょうか。彼らだけではなく児童全員で、何かを極めた人の演奏を聴ける機会は大変貴重です。その時にはわからなくても、その経験が生きてくる時が必ず来ます。聖学院は子どもたちの心と感性に響くものを大切にしている学校だと思います。

（取材日／2022年7月）

※1　音楽科の小学校学習指導要領（出典：小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編　https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_007.pdf）

※2　タンギング
管楽器の演奏で、舌による音の出し方の技法の総称。（出典：Goo辞書　辞書　国語辞書　美術・音楽 音楽「タンギング」の意味 https://dictionary.goo.ne.jp/word/タンギング）

※3　ダニエル・ゲーデ
ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団前コンサートマスター。1994年までベルリン芸術大学で教鞭をとり、その後ウィーン・フィルでコンサートマスターを務めた。現在はニュルンベルク音楽大学ヴァイオリン科主任教授。日本では弦楽4重奏他多彩なコンサートを行い、特に2011年以来東日本大震災で被災した人々に寄り添いたいとの希望から東北の学校、病院他で60回以上のボランティア・コンサートを行っている。

聖学院大学
2023年4月から
児童学科は子ども教育学科へ

社会の変化に伴い、近年子どもの多様化が顕著になっています。子どもについて考えるときに用いる「子どもとは何か」という子ども像にもダイバーシティという観点が必要です。この一人として同じではないということを受け入れ、そのままに向き合っていく姿勢を聖学院大学は大切にしています。学生たちがそのような姿勢をもち、学びをより深められるように2023年4月に聖学院大学では児童学科から子ども教育学科へ名称変更を行います。久保田先生が聖学院大学で担当する音楽も、幼稚園・小学校教諭としてのスキルというだけではなく、多様な子どもたち一人ひとりと向き合える学生を育てるためのものでもあります。

私のとっておきの1曲　官野先生: 交響曲第8番 ト長調 作品88（アントニン・ドヴォルザーク作曲）

聖学院の音楽教育

focus

聖学院小学校

音楽関連行事

音を楽しむことを重視し、一人ひとりの音色を大切に育む

小学校2年生の音楽の授業の様子。手を使って音の高低を学んでいます。

聖学院小学校には、日頃の音楽学習の成果を披露する「音楽会」という行事があります。毎年11月に聖学院中高の講堂にて2日にわたって歌や楽器演奏を行います。1日目は全学年がお互いの演奏を見学し、2日目は保護者向けの発表です。この2年間は新型コロナウイルスの影響で、合奏やボディパーカッション、ハンドベルなど楽器演奏中心で開催しています。会場も小学校のチャペルに変え、保護者向けには配信や録画で対応しています。まだ歌えないのは残念ですが、創意工夫のもと行事を継続しています。聖学院小学校には他にも、クリスマスページェントやハンドベル発表会など、音楽を中心とした行事があります。

「児童には、まず音楽を楽しんでほしいと思っています」と語る音楽科の本田晃先生。「子どもたちは音楽会を通して、一人ひとりの音が一つになって美しいハーモニーが奏でられることを体験します。他の学年の発表に触れることで、その時その年齢でしか出せない声や音色があることにも気づきます。また、学年が進むにつれてより複雑な演奏ができるようになることを知り、もっと豊かに演奏したい、自分ならこうしてみたいというモチベーションにつながります。」

児童の中には、休み時間にYou-Tubeで聴いた音をピアノで弾いている子どもがいるそうです。聴いた音を探して再現できるというのは、自分の中に音色や音程をはかる感覚が育っているということです。幼い時から音楽に対する肯定的な気持ちがあるからこそ育っていく感覚です。本田先生は、「小学生のうちから、音に興味をもって、自分の好きな音を探して見つけてほしいと願っています。自分の好きな音が見つかれば、それは一生の宝物になります。そのためにも様々な音楽に触れる環境を作っていきたいと考えています」と言います。音楽会に加え、音楽科として学期の終わりに音楽の授業の中でクラス単位の発表会を行っています。歌でも楽器でもダンスでも表現手法は自由です。子どもたちがクラスの友だちの前で音楽を自分なりに表現する。少し勇気が必要ですが、拍手をもらうと自信につながり、音楽がより好きになる、そのための発表会です。発表はしないけれど、しっかり発表を見るのもOKです。聖学院小学校では、子どもたちが音楽を楽しみながら、自分の好きな音、自分にしか出せない音に出合うことを願って音楽教育を行っています。

本田晃先生

イングリッシュ・ハンドベル

ハンドベルは教会から生まれた楽器です。音階を一人ひとりに振り分けているので誰か一人が抜けても成立しません。またシンプルな構造ですが、鳴らす人によって音色が変わります。自分だけの音があり、自分がかけがえのない存在であることを意識できる聖学院らしい楽器です。聖学院小学校では音楽教育の一環としてハンドベルを取り入れています。

私のとっておきの1曲　本田先生: めぐり逢い（アンドレ・ギャニオン作曲）

聖学院の音楽教育

focus

女子聖学院中学校・高等学校

教養としての音楽とハレルヤコーラス

授業を通じて受け取った感情を表現につなげる

音楽室にて、川俣リサ先生。

女子聖学院中高では音楽を表現する楽しさに加え、歌や曲の背景など知的な部分を理解することにも力を入れています。「音楽は、歌ったり鑑賞したりという体験に、歌詞を理解することや作曲家の人生を知ることなどの教養が加わって、学びを深めていく教科だと思います」と音楽科の川俣（かわまた）リサ先生。さらに川俣先生は他教科で学んだことが生徒の中で音楽と結びつき、新しい気づきが生まれるきっかけになる授業を心がけているそうです。例えば「ブルタバ」という曲は、以前は「モルダウ」という曲名で知られていました。いずれもチェコを流れる同じ川の名前です。モルダウがドイツ語の呼び名で、チェコ語の呼び名がブルタバです。この曲が作られた当時、チェコはオーストリア帝国の支配下にあり、自国語で話すことさえ禁じられていました。国民楽派の作曲家であるスメタナはチェコの人々の祖国への大切な心を失いたくないという思いでこの曲を作りました。しかし「ブルタバ」という名前で発表できなかった事情があります。そういう背景を知った上でこの曲を聴くと、伝わってくるものも変わってきます。こうして社会科の知識と結びつけることができれば、一人の作曲家の物語だけではなく、その背後に広大なドラマが広がっていきます。

そのような体験を通して、生徒一人ひとりが様々な楽曲から受け取ったものを、今度は歌にのせて表現します。その集大成としてハレルヤコーラスがあります。ハレルヤはヘンデルが作曲したメサイアの第2部最終曲（第44曲）です。「Hallelujah（神を讃えよ）」と繰り返されるコーラスは、テレビやCM、映画などにおいて何度も使われていて、曲名は知らなくても多くの人が一度は耳にしたことがあるであろうとても有名な楽曲です。女子聖学院ではクリスマス礼拝で中学、高校それぞれの全校生徒が歌います。中学1年で楽譜を読み、中学2年ではみんなでハーモニーを作る楽しさを知り、中学3年生で全曲暗譜して完成します。高校生は中学で覚えた自分のパートを復習します。「生徒たちは授業内で夏から一生懸命練習し、言葉では言い表せない努力を積み重ねてたどり着くのがハレルヤコーラスの舞台です。生徒が歌い終わるとチャペル一杯に感謝と喜びのHallelujahという響きで満たされ、本当に感動します」と川俣先生は言います。

パイプオルガン体験

中学1年生は、1月にバッハのフーガ・ト短調について学びます。パイプオルガンを使った楽曲のため、パイプオルガンの知識も身につけます。女子聖学院中高にはチャペルにパイプオルガンがあるため、その際、生徒は本物のパイプオルガンを見に行きます。しかも中に入って構造を見たり内側から音を聴いたりします。「音の大きさや響き方、荘厳さを生で、しかも内側から体験できるのは女子聖学院中高ならではだと思います」と川俣先生。本物に触れられる、とても貴重な学びが女子聖学院中高にはあります。

私のとっておきの1曲　川俣先生：平均律クラヴィア曲集第1巻第4番　嬰ハ短調　BWV849（J.S.バッハ作曲）

聖学院の音楽教育

focus

聖学院中学校・高等学校

多角的に音楽に触れる授業を展開

音楽を通じて人生の豊かさの引き出しを増やす

iPadのアプリでサウンドロゴを作成。生徒は「のびのびした」「胸が熱くなる」などの言葉と校内の場所をテーマにしてサウンドロゴを作りました。

音楽は他の教科と異なり、個人の好みやバックボーンによって関わり方が大きく変わります。そのため生徒から「なぜ音楽を学ぶのか」と質問されることがあります。それは、もしかすると音楽教育の根源的な問いかもしれません。聖学院中高の音楽科の川西祐毅（かわにしゆうき）先生は、この問いに対し「理由ではなく、音楽によって何ができるのかに目をむけてほしいです」と言います。音楽は、歌や演奏に関わることだけではなく、どんな音や曲が好きかを言語化し自分のパーソナルな部分を友だちと共有したり、また、その力を現実社会につなげていくこともできます。そのため、川西先生は音楽の多面性に触れられるような様々な授業を展開しています。

その一つにiPadのアプリを使った授業があります。理科とコラボレーションした授業で、生徒は音色と音の組み合わせによって生まれる効果について学び、それらの知識をもとにアプリ上でサウンドロゴ(※)作りに挑戦します。今まで演奏技術を持たない人が音楽に関わろうとすると、技術的な理由でそれ以上関われないということがありました。しかし、iPadのアプリを使えば技術がなくても音を生み出すことができ、音を通じて自分を表現する楽しさを体験できます。

また、音楽に東洋的身体技法を取り入れた授業もしています。授業で歌を歌うとき、生徒は姿勢を正します。そのままでは体に力が入りすぎて声が出にくいため、適度に力を抜くことも必要です。人は自分の状態を内観し感じ取ることで、身体の使い方を変えることができます。「発声技術の上達だけではなく生徒には変化に気づく力をつけてほしい」と川西先生は言います。

「なぜ音楽を学ぶのかの答えは、受け身ではなく、自分で探しにいくものです。音楽は芸術でもあり、同時にツールでもあります。他の価値観と出合い可能性を広げる大切な体験です。音楽を通じて人生の豊かさの引き出しを増やしていってほしいです。」

聖学院中高での合唱コンクールの実現が川西先生の当面の目標の一つです。合唱コンクールの体験が生徒たちの自分なりの行動変容につながってくれたらと考えているそうです。

※サウンドロゴとは、企業やブランドを印象付ける短い曲のことです。

川西祐毅先生

「勇気をもらえる音楽」

聖学院中高の総合学習では「勇気をもらえる音楽」というテーマでYouTubeで曲を探し、共有する授業を行いました。音楽は自分の趣味趣向が強いため聴く音楽の傾向が決まりがちです。生徒それぞれが自分なりの解釈で曲を選ぶことでお互いの引き出しが増えていきます。「演奏ができなくても、解釈したり選択することも音楽の一つだと思います」と川西先生。プロの音楽家や評論家でなくても、好きな音楽を言葉で表現できることが人生の豊かさにもつながります。

私のとっておきの1曲　川西先生: スターバト・マーテル（アントニン・ドヴォルザーク作曲）

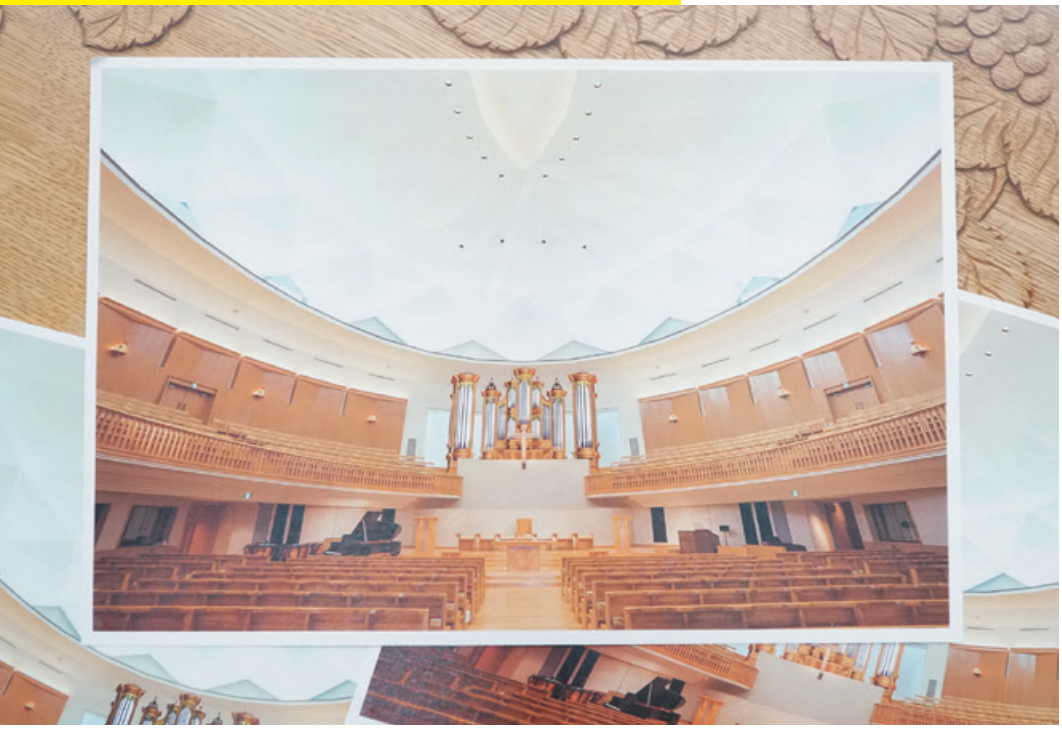
聖学院の音楽教育

focus

聖学院大学

パイプオルガン設置に向けて

創立120周年の音が、チャペル全体から鳴り響く



設置されるパイプオルガンの完成イメージ図。クラシカルでありながら近代的で、チャペルにとても調和したデザインです。

聖学院大学のチャペルは、建築家で東京大学名誉教授の香山壽夫先生が設計し日本芸術院賞やBCS賞（建築業協会賞）を受賞した建築物で、大学のシンボル的な存在です。聖学院創立120周年にあたる2023年、このチャペルにパイプオルガンが設置されます。今回設置されるパイプオルガンは幅約8・5m高さ約7m。チャペルの正面2階部分を覆う大きさです。

パイプオルガンの設置に関してはチャペル建設当初から予定されており、竣工の翌年である2005年にパイプオルガン設置委員会が発足しました。導入まで18年の歳月をかけたのは、やはりパイプオルガンを設置するということが壮大なプロジェクトであることを物語っています。そもそもパイプオルガンとはどういうものかについて研究することから始まり、どういうパイプオルガンを製作したら良いのかプロのオルガニストに指導を求めることもありました。その中でもひときわ時間と労力を割いたのがビルダーと呼ばれる製作会社の選定です。パイプオルガンは設置して終わりではなくメンテナンスも必要です。ビルダー選びはパイプオルガンの一生に関わります。設置委員会の菊地順先生は「当初考えていたドイツのビルダーが諸般の事情で断念せざるを得ず、選定からやり直したこともあります」とビルダー選択時のエピソードを教えてくれました。

大学のチャペルは、地域の教会の礼拝堂でもあります。パイプオルガンが導入されることでより豊かな礼拝を守ることが期待されています。同設置委員会の神吉乃三巳さんは「定期的にコンサートなどを開き、学生や地域の方々にパイプオルガンを擁する〝場〟としてのこのチャペルの魅力や音楽文化も発信しつつ、共に育んでいければ」と語ります。テクノロジーが進化した現在において、パイプオルガンの演奏は機械で精密に録音し、忠実に再現することも可能です。しかし、機械を通じた音とパイプに空気を通して鳴らす音は違います。同設置委員会の山田康弘先生は「パイプオルガンは会堂と一つになった楽器。チャペル全体から音が鳴り響きます。このチャペルでしか聴けない響きを全身で味わってほしいです」と生でパイプオルガンを聴くことの意味を語ります。チャペル全体で鳴り響く音とはどのようなものなのか、来年の完成が待ち遠しい限りです。

お話をうかがった設置委員会の菊地順先生（左）山田康弘先生（中央）、神吉乃三巳さん（右）

パイプオルガンと教会

パイプオルガンは、一本一本が笛になっているパイプを束ねた楽器です。パイプに空気を送り込むことで音を出します。「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」（創2:7）という言葉があります。空気を吹き込んで音を出すという点がとても聖書的で、教会で導入されている理由の一つにもなっています。

私のとっておきの1曲　山田先生：われ汝に呼ばわる、主イエス・キリストよ BWV639（J.S.バッハ作曲）
菊地先生：フーガト短調 BWV578（J.S.バッハ作曲）　神吉さん：トッカータとフーガ ニ短調 BWV565（J.S.バッハ作曲）

歩む人たち 15

［卒業生を尋ねて］

女子聖学院中学校・高等学校卒業

川越（かわごえ） 麻弓（まゆみ） さん

女子聖学院中高の吹奏楽部が練習をするチャペルにて。かつては川越さんも吹奏楽部に所属していました。

好きな音と、支えてくれる先生に出会えたおかげで夢に向かって邁進できました

「温かくて優しくて包容力があって力強くも繊細。とにかく音色が好きです。」ユーフォニアム奏者として東京藝術大学の音楽学部に通う川越麻弓さんはユーフォニアムの魅力についてそう語ります。小学校の吹奏楽部でユーフォニアムを担当していましたが、本格的にその魅力に目覚めたのは、自衛隊の音楽隊の演奏を聴いたのがきっかけでした。「自分もいつかこんな音を出せるようになりたいと思いました」と川越さんは言います。女子聖学院中高では吹奏楽部に所属し、高校1年生からはその年コーチに就任した岡本謙（おかもとけん）先生（12ページ参照）の指導を受けます。演奏者としても第一線で活躍する岡本先生は川越さんの実力に気づき、コンクール出場を勧めます。プロの目線でコンクール対策のアドバイスをし、そうしたサポートのもとで国内の18歳以下のコンテストで3回優勝しました。

しかし、東京藝術大学の受験を控えた時期、川越さんは不安と孤独の中にいました。音楽の場合は模試などによって自分のレベルを確認できないからです。また学年には音大を目指す生徒が一人だけで、日々の練習の苦労や不安を共有できる相手がいませんでした。遅くまで一人で学校に残って練習し、そして毎日泣きながら帰っていたそうです。そんなくじけそうな心を支えたのが音楽の授業を担当していた佐々木恵（ささきめぐみ）先生でした。佐々木先生は一般の受験とは違う悩みがあることを理解し、親身になって一緒に考え、時には一緒に泣いてくれたそうです。川越さんは「佐々木先生に出会えていなかったら受験を最後までやり切れていたのかわかりません」と言います。

今後の目標について川越さんは「私が様々な人の演奏から勇気や癒しをもらったので、次は私が誰かを元気づけ、励ませる存在になりたいです」と語ります。

●PROFILE

第15回日本ジュニア管打楽コンクール 金賞。
第14回日本管弦打楽器ソロ・コンテスト グランプリ クリスタルミュージュ賞及び文部科学大臣賞。
第4回 JETA 学生ソロコンクール ジュニア部門第1位。
東京藝術大学4年在学中。

高校3年生最後の音楽の授業で佐々木先生に感謝の色紙と花束を贈呈。「音楽を通して、たくさんのことを教えていただきました」と川越さん。（写真右上）

2009
小学校の吹奏楽部でユーフォニアムを担当

2010
自衛隊の音楽隊の演奏を聴きユーフォニアムの魅力を知る

2013
女子聖学院中学校・高等学校入学

2018
受験で不安と孤独を体験する

2019
東京藝術大学音楽学部入学

私のとっておきの1曲　川越さん: ソング・フォー・イナ（フィリップ・スパーク作曲）

女子聖学院中高
吹奏楽部コーチ

支える人たち

聖学院を外から支えてくださっている人たちに
聖学院への想いをうかがってみました。

No.
05

フルート奏者・吹奏楽指導者
岡本（おかもと） 謙（けん） 先生

1990年、国立音楽大学を卒業。シエナ・ウインドオーケストラ、東京吹奏楽団においてフルート&ピッコロ奏者を務める。現在は東宝ミュージカル、劇団四季、宝塚歌劇団などのオーケストラ・プレイヤーとして活躍している。東京国際大学吹奏楽団音楽助監督。2016年12月より女子聖学院中学校高等学校吹奏楽部コーチを務める。

生徒の主体性を尊重し、きずなを強めて一つの音を作る その体験を大切にしています

女子聖学院中高の吹奏楽部は、吹奏楽コンクールやアンサンブルコンテストにおいてここ数年、金賞受賞や都代表選考会進出など輝かしい実績を残しています。その躍進を支えているのが、コーチを勤めている岡本謙先生です。岡本先生は劇団四季や宝塚歌劇団でも演奏されているプロのフルート奏者です。6年前、コーチを探していた女子聖学院中高吹奏楽部からの依頼を受け、就任しました。岡本先生に指導法や大切にしていること、吹奏楽部に対する思いなどをうかがいました。

「コーチを引き受ける前から、様々な学校のパート指導（楽器ごとの指導）の経験はありました。重い責任ではあるものの、いつか吹奏楽部を指導してみたいという思いがあり、コーチのお話をいただいた時には夢を一つ叶えてもらったと感じました。この吹奏楽部にはもともとポテンシャルがあります。そのため私が一番大切にしてきたことは生徒の主体性です。もっと上達したい、良い音を奏でたいと思う気持ちを引き出すことに注力しています。それでも部員数が多い吹奏楽部ではモチベーションに違いがでます。他の部員と気持ちに開きがある生徒には個別に話をしてサポートしています。一方、やる気がある生徒は先行してしまうケースもあります。そういう生徒には周囲をよく見て、ついてこられない生徒がいないか気を配るように頼んでいます。

女子聖学院中高の吹奏楽部の強みは上級生と下級生のつながりにあります。演奏が一つにまとまりますし、一つにまとまった体験がまたつながりを育み、好循環を生み出します。そのため特に上級生には下級生のフォローを促しています。3月の上級生の引退式では後輩たちが涙を流しながら演奏します。その様子に私も胸が熱くなります。そういう関係をもっと深めていきたいと思っています。」

岡本先生のお話からはプロの音楽家としての視点と、人としての成長を促す教育者としての視点が感じられました。第一線で活躍している指導者のもと、つながりを強めてハーモニーを形成する。生徒たちにとって吹奏楽部での時間は、社会に出てからも生きてくる貴重な経験になっていると思います。

私のとっておきの1曲　岡本先生: セレナーデ第9番 ニ長調 K.320「ポストホルン」より第4楽章 ロンド（W.A.モーツァルト作曲）

keep on
記念祭/ヴェリタス祭

聖学院中高、女子聖学院中高の記念祭（文化祭）、聖学院大学のヴェリタス祭（学園祭）は、
いずれも生徒･学生が主体となって企画･運営し、多くの来場者を迎えてきた一大イベントです。
新型コロナウイルスによる制限のために、イベント開催が難しい状況が続いていますが、精いっぱいの工夫をして継続しています。
今年度の各校記念祭･ヴェリタス祭のテーマと、
そこに込めた実行委員の生徒･学生の思いをご紹介します。

駒込キャンパス 【記念祭】11月2日 水 －3日 祝

聖学院中学校･高等学校

記念祭委員長
高校2年生
篠原 飛陽 さん

テーマ「響 ～今までにない音を～」

記念祭は、実行委員と各団体、委員会や先生方の協力によって作り上げることができます。私たちはそれを一つの音楽のようだと捉えました。今年度もコロナの影響で声を出すことが憚られる状況にありますが、「声は出せなくても、今までよりさらに楽しい記念祭にしていきたい」「声以外の方法で私たちの『楽しい』という気持ちを届ける方法があるのではないか」と考えました。今年のテーマは、聖学院生が一丸となって記念祭という「音」を聖学院全体に響かせたいという思いが込められています。

●主なプログラム
学年、有志、クラブ、委員会等による発表と展示
時間は両日とも、9:30～12:00、13:00～15:30（午前午後・完全入替制）
※事前にポータルサイトでの予約が必要です。

女子聖学院中学校･高等学校

記念祭実行委員長
高校2年生
K. H.さん

テーマ「Share Moment, Share Life」

女子聖学院の記念祭は、実行委員会を中心に生徒主体で企画・運営を行っています。今年のテーマ「Share Moment, Share Life」は、「かけがえのないこの一瞬を共有し、一生の思い出にしてほしい」という思いを込めて決めました。コロナでさまざまな制限はありますが、来てくださった方が楽しめる企画をみんなで考えて準備しています。「明るく、元気な女子聖学院」を見ていただきたいです！

●主なプログラム
学年、有志、クラブ、委員会等による発表と展示
時間は両日とも、9:00～11:30、13:00～15:30（午前午後・完全入替制）
※事前にホームページよりご予約ください。

さいたま上尾キャンパス 【ヴェリタス祭】 11月2日 水 －3日 祝

聖学院大学

ヴェリタス祭実行委員長
日本文化学科4年生
近藤 飛大 さん

テーマ「遊園地」

ヴェリタス祭は、実行委員会を中心に学生主体で企画・運営しています。今年のテーマは「遊園地」で、対面開催の予定です。この2年はオンラインだったので、実行委員のほとんどに来場者を迎えた経験がありません。そこで対面開催をイメージしやすく、また準備をしやすくなればという思いでテーマを決めました。今年は3年ぶりに卒業生にも来てもらえます。今まで引き継いできたヴェリタス祭の伝統と、オンライン開催を経て獲得した新しさを見てほしいと思います。

●主なプログラム
・メインステージ：部・サークルによる企画、演目
・校舎内：部・サークルによる展示、学外有志団体による展示　など
11/2（水）10：00～16：30、11/3（祝）10：00～19：00（後夜祭含む）

2022年度ヴェリタス祭実行委員の皆さん

※プログラムは変更の可能性がありますので学校HP等でご確認下さい。

まだまだあります！

Seig NEWS

学生も生徒も教員も
次のステップへと
日々新しい試みをしています。

学校法人聖学院

聖学院NEWS LETTER「社内報アワード2022」でシルバー＆ブロンズ賞W受賞

聖学院NEWS LETTER（本冊子）は、「社内報アワード2022」（主催：ウィズワークス株式会社、後援：株式会社東洋経済新報社）の「紙社内報部門1冊子（20ページ以上）」において2021年12月号がシルバー賞を、2022年3月号がブロンズ賞を受賞しました。このアワードは、「目的」「設計」「ターゲット」「情報」「デザイン・ビジュアル」「テキスト」の6項目に基づき、専門家が社内報を審査・表彰するものです。聖学院では学内報（社内報）として「聖学院NEWS LETTER」を3ヵ月に1度発行しています。これからも一貫教育の魅力を掘り下げ、関係者の皆様にお届けしていきます。

聖学院大学

聖学院大学児童学科30周年を祝おう！ホームカミングはじめ記念講座が目白押し

大学では児童学科30周年を記念し、様々なイベントが行われています。7月23日（土）にはホームカミングが開催されました。また「児童学科30周年記念 AH連続講座 子どもと教育 ～子どもとつながるさまざまな世界～」と題した4つの講座が、6月から11月にかけて企画されています。なお、次回10月5日（水）の講座は「子どもの本をつくるひとたち」（荻原華林氏）を予定しています。詳細は大学HPをご覧ください。

聖学院大学

学校法人聖学院

本学SDGsの取り組みを掲載「東洋経済ACADEMIC SDGsに取り組む大学特集 Vol.4」

7月8日（金）発売の『東洋経済ACADEMIC SDGsに取り組む大学特集 Vol.4』に大学のSDGsの取り組みが掲載されました。清水正之学長のインタビューやサステイナビリティ推進センター所長・西海洋志准教授とコーディネーター・正森涼子さんの対談（サステイナビリティ推進センターの紹介）、過去の取り組みも掲載されています。

聖学院大学

心理福祉学部附属心理相談室講演会「子育て世代のメンタルヘルス」を開催

8月31日（水）、オンライン講演会「子育て世代のメンタルヘルス」が、聖学院大学学長裁量経費の支援を受け開催されました。第1部では心理福祉学部附属心理相談室の岩田裕美相談員と心理福祉学部の大橋良枝教授による講演、第2部では現代の子育てについてトークセッションが行われました。地域貢献活動の一環としての役割を果たし、地域の皆様との交流を深める時が持たれました。

※学校法人聖学院はグローバル・コンパクトに署名・加入し、SDGsを目指した活動を行っています。
※SDGs…2030年までの実現をめざし掲げられた、17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標」

女子聖学院中学校・高等学校

夏の夜の優雅なひととき、ナイトチャペルコンサート

8月6日（土）、ナイトチャペルコンサートが開催されました。出演は高62回小原明実さん（メゾ・ソプラノ）、高62回鈴木佳都紗さん（チェロ）、高64回門脇麻里子さん（メゾ・ソプラノ）と佐々木恵先生（ピアノ・パイプオルガン）。約100名の方（完全予約制）にご来場いただき、「主よ人の望みの喜びよ」「無伴奏チェロ組曲」「オンブラマイフ」などの曲目が演奏され、チャペル一杯に響く音に心が満たされる時間となりました。

女子聖学院中学校・高等学校

女子聖学院伝統の運動会、3年ぶりに開催！

6月28日（火）、代々木第一体育館にて3年ぶりの運動会が開催されました。今年のスローガン「飛翔」にはコロナ禍で2年間運動会が開催できなかった悔しさをバネに、伝統を途絶えさせることなく、運動の得意不得意にかかわらず、運動会という場で羽を広げ大空に羽ばたいてほしいという思いが込められています。当日の競技はもちろん、ここまでの準備一つひとつに取り組み、やり遂げた達成感を味わった生徒たちの表情を見ることができました。

聖学院大学総合研究所

2022年度第1回 心理学研究講演会を開催 教育現場における心理職 スクールカウンセラーと学校の協働を学ぶ

9月16日（金）、「心理学研究講演会」が行われました。この2年あまり、コロナ禍によって教育現場は多くの制約を受け、様々な変化を余儀なくされてきました。長年、学校臨床心理学の領域で仕事をし、スクールカウンセラーの研修や助言にも携わってきた聖学院大学心理福祉学部教授の伊藤亜矢子先生と共に、教育現場における心理職の今について考える時が持たれました。

聖学院中学校・高等学校

多彩な文化との出会いを通して育む協働・共創力 オーストラリア研修

聖学院中高では6年間の一貫教育を通して、「自分の賜物を大切にして外の世界でもチャレンジできる」「異文化異言語でも、他者のために思いやりをもって協働・共創できる」人材の育成を目指しています。英語力向上の実践の場として海外研修も充実させており、中3〜高2を対象としたオーストラリア研修もそのプログラムの一つです。コロナの影響により3年ぶりの開催となりましたが、落雷の影響による出発便欠航というトラブルを乗り越え、約36人の生徒がホストファミリーと過ごす英語漬けの2週間（8/4〜8/17）を経験。現地校では英語特別クラスでの学びを軸にスポーツやフィールドワークを楽しみ、異文化の中で学びを深めました。

※学校法人聖学院はグローバル・コンパクトに署名・加入し、SDGsを目指した活動を行っています。
※SDGs…2030年までの実現をめざし掲げられた、17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標」

聖学院幼稚園

ワクワクドキドキのお泊まり保育

7月7日（木）から8日（金）にかけて年長組のお泊まり保育が行われました。3年ぶりということもありますが、今回初めて幼稚園に泊まることになり（以前は御殿場の東山荘）、子どもたちはもちろん、先生たちもワクワクドキドキでこの日を迎えました。いつも過ごしているクラスの部屋は布団を敷くので上履きは厳禁！夕食のカレー作りの後、お風呂は近所の銭湯へ。夜はお楽しみ会と花火大会。その後は暗い屋上に上がり、七夕の星空を眺め、遠くに光るスカイツリーも見ることができました。いつもとちがう幼稚園での2日間は、天気にも恵まれ、子どもたちの笑顔があふれていました。

聖学院みどり幼稚園

思いきり水遊びを楽しんだ夏期保育

8月23日（火）から26日（金）までの4日間、夏期保育が行われました。どの日も天候に恵まれ、子どもたちは園庭に用意された3つのプールや色水遊びコーナーで思いきり遊びました。おやつはボランティアの保護者の方々に協力いただき、日替わりで、スイカ、ポークビッツ、蒸かしたジャガイモ、アイスキャンディーが振る舞われ、どれも子どもたちに大人気でした。広い園庭にたくさんの遊び場を作った夏期保育。子どもたちは、夏休み中の幼稚園で、普段の保育にはない特別な遊びの時間を存分に楽しみました。

聖学院小学校

小田原へ！久しぶりの遠足 ～2年生・5年生の合同遠足～

7月13日（水）、2年生と5年生合同で遠足に行きました。多くの行事が中止になっている中、本当に久しぶりの校外行事です。新宿から特急ロマンスカーで小田原駅にて下車。まずは大きくそびえる「小田原城」へ向かい天守閣から小田原市内を一望しました。その後は「神奈川県立　生命の星・地球博物館」へ。自然や命に触れる展示に一人ひとりさまざまな刺激を受ける貴重な経験になりました。慣れない移動や電車の乗り換え、そしてお弁当まで5年生が2年生を頼もしくサポート。心配していた雨も降らず、すべてが守られた一日になりました。

編集後記

音楽特集はいかがだったでしょうか。子どもたちや学生のために一生懸命な先生たちの熱い想いが、保護者の皆様や読者の方々に少しでも伝われば良いな、と思いながら編集しました。スペースの都合で「私のとっておきの1曲」を選んだ理由やエピソードをご紹介することができませんでしたが、それを知りたい方はぜひ先生に直接きいてみてください。きっと素敵なエピソードを教えてくれると思いますよ！
ちなみに私のとっておきの1曲は藤井風さんの『帰ろう』です。
最後までお読みくださり、本当にありがとうございました！（Pman）

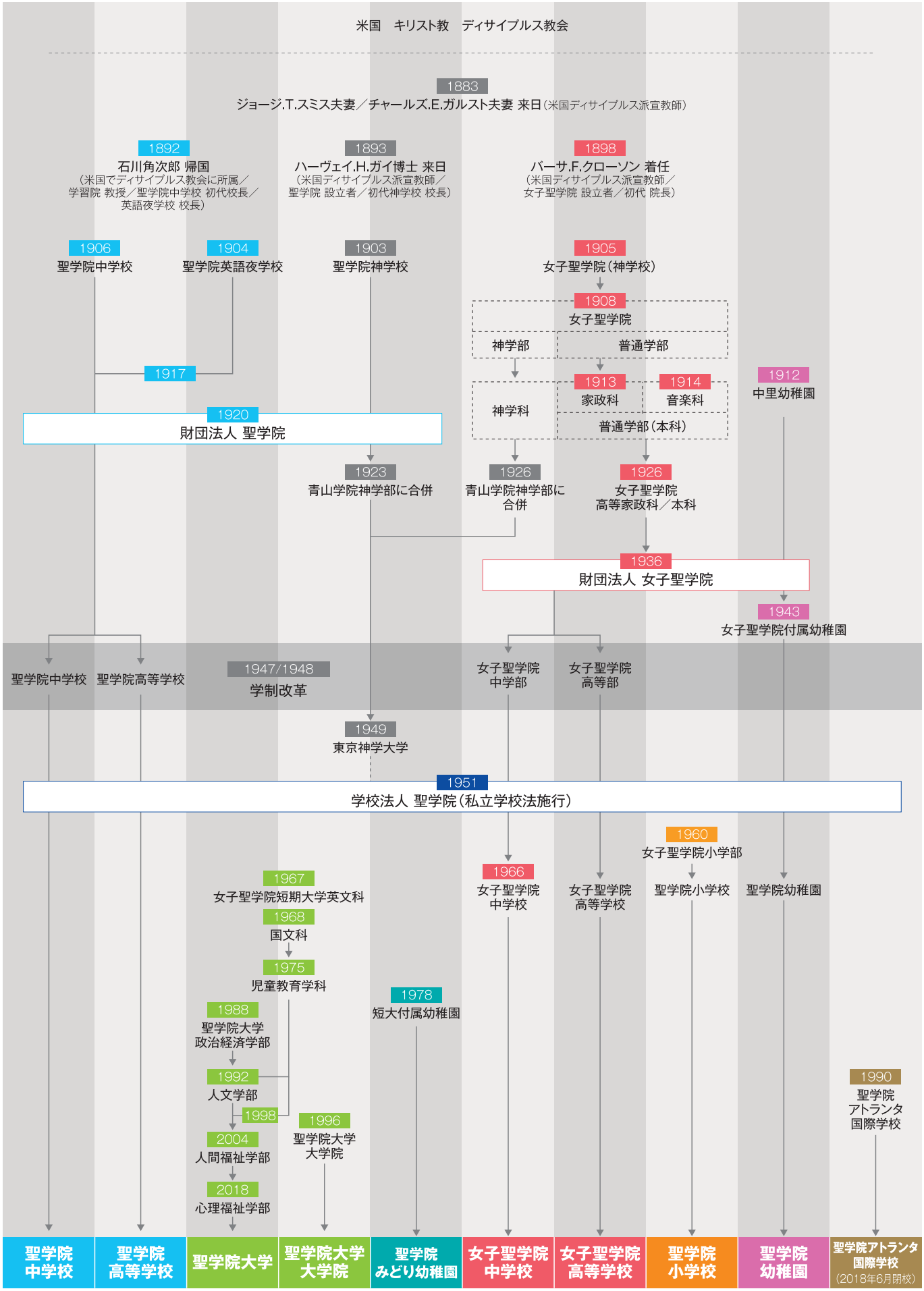
SEIGAKUIN 120th

2023年、聖学院は創立120周年を迎えます

1903年に神学校として生まれた聖学院は、現在では幼稚園から大学院まで合わせ、
約4,600名の園児・児童・生徒・学生が通う学校法人に成長しました。
その時の流れの中、「神を仰ぎ 人に仕う」という建学の精神は脈々と受け継がれ、
人に、社会に、世界に貢献する人材を輩出し続けています。

聖学院の歴史

History of Seigakuin University & Schools



EPISODE #18

聖学院歴史探訪

#18 聖学院教育の歴史

日本でのディサイプルス教会の伝道

（左から）スミス夫人、ガルスト宣教師

1883（明治16）年10月、アメリカ・ディサイプルス教会より、ジョージ・T・スミス夫妻とチャールズ・E・ガルスト夫妻が日本伝道のために派遣されてまいりました。この4人がディサイプルス教会が日本に派遣した最初のミッショナリーでした。彼らは翌年の5月には東北秋田の地で伝道を開始いたします。しかし、もともと病弱であったスミス夫人はその翌年、すなわち1885年に次女を出産されて間もなく天に召されていきました。30代の若さでありました。ディサイプルス日本伝道最初の殉教者であります。彼女の死を記念してアメリカ・ディサイプルス教会で多くの献金が集められ、そのお金で秋田キリスト教会（現：秋田高陽教会）の会堂が建ったのです。

ガルスト夫妻も本当に苦労に苦労を重ねて東北を伝道して回り、ついに1898年ガルスト宣教師は風邪がもとで天に召されます。まだ46歳の若さでした。青山墓地に葬られています。夫人が「何か遺言はありませんか」と尋ねられたところ“My life is my message.”（私の人生すべてが私の遺言だ）と答えられたそうです。

このように血を流し身を削るような伝道活動のおかげで教会の基盤が固まり、以後続々と宣教師たちが派遣されてくることになるのです。

（次号に続く）

出典：聖学院キリスト教センター編『聖学院の精神と歴史』聖学院ゼネラル・サービス、2006年版（出典より一部変更）

学校法人 聖学院
理事長／清水　正之　院長／山口　博
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2　Tel 03-3917-8351
ホームページ https://www.seig.ac.jp/　E-mail pr_h@seigakuin-univ.ac.jp

■さいたま上尾キャンパス

聖学院大学
・政治経済学部／政治経済学科
・人文学部／欧米文化学科　日本文化学科　児童学科
・心理福祉学部／心理福祉学科
学長／清水　正之　創立／1988年　〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1　Tel 048-781-0925

聖学院大学大学院
政治政策学研究科／文化総合学研究科／心理福祉学研究科
創立／1996年　〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1　Tel 048-780-1801

聖学院みどり幼稚園
園長／赤田　直樹　創立／1978年
〒331-0045 埼玉県さいたま市西区内野本郷820　Tel 048-622-3864

■駒込キャンパス

聖学院 中学校 高等学校
校長／伊藤　大輔　創立／1906年
〒114-8502 東京都北区中里3-12-1　Tel 03-3917-1121

女子聖学院 中学校 高等学校
校長／安藤　守　創立／1905年
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2　Tel 03-3917-2277

聖学院小学校
校長／佐藤　慎　創立／1960年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-1　Tel 03-3917-1555

聖学院幼稚園
園長／田村　一秋　創立／1912年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-2　Tel 03-3917-2725

●インターネットでの寄付のお申し込みについて

クレジットカード（VISA、MasterCard）をお持ちの方は、お申し込みから入金までご自宅等で、PC、スマートフォン、携帯電話からインターネットによるお手続きができます。下記URL、QRコードにアクセス下さい。

https://www.seig.ac.jp/asf/

住所変更・広報誌の発送停止・お問い合わせ

https://www.seig.ac.jp/asf/contact/

学校法人聖学院ASF事務局

Tel 03-3917-8530（月～金 9:00～17:30）